



Yokohama National University Faculty of Economics

Euro-Japan Dialogue 2011 Report

2011年度 欧州英語討論会報告書



Yokohama National University
Faculty of Economics
Euro-Japan Dialogue 2011 Report





The Continuing Evolution of Euro-Japan Dialogue

Professor

Alexander McAulay

The Euro-Japan Dialogue Programme continues to evolve and add innovations as it heads towards its seventh year. This was the 6th Euro-Japan Dialogue, and once again we were honored by the warmth of welcome, professionalism, and flawless organization of our European hosts. At The University of Edinburgh we were met with down-to-earth Scottish hospitality. The participating Edinburgh students were all fans of Japanese culture, and their insightful questions and formidable language skills were a credit to their institution. In Malta, the best of Mediterranean culture was on display, as our University of Malta colleagues took care of our every need. Their students were less familiar with Japan, but equally curious. They presented and discussed with maturity and enthusiasm. Many of the YNU group voiced a desire to spend more time on this sun-soaked campus.

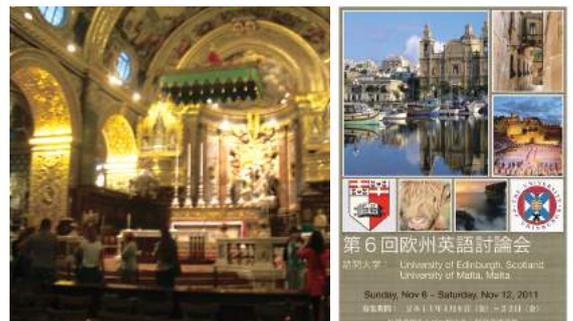
The Euro-Japan Dialogue sessions had an eclectic mix of themes this year. In Edinburgh, students presented on topics such as non-verbal communication, gender roles in society, and interpersonal relationships in national settings. In Malta, the focus was on Ageing Society, an issue both Japan and

Malta are grappling with. Presentations were skillfully carried out and a lively and fruitful discussion followed. Local government was the focus of our visit to Edinburgh City Chambers. The students also attended a lecture at University of Malta on 'The Economics of Micro-States', and took part in a talk given by His Excellency Mr. Kim Young-Seok, the South Korean ambassador to Malta, entitled 'The Geopolitics of South Korea's Foreign Policy'

This was my fourth time to lead the group, and arguably it was the most challenging trip to date. The larger group meant students had to communicate more and work harder to organize themselves. The programme is now accredited, meaning that student performance was subject to formal assessment for the first time. With almost half of our group being drawn from international students, it meant the YNU group had to successfully negotiate intercultural communication among themselves as well as with their European peers. Logistically, there were also tough challenges. Travelling from Edinburgh to Malta meant a 4.30 AM start on the Wednesday. A 4-hour delay when changing planes at London's Heathrow meant we arrived in Malta late in the evening, and the students needed stamina and willpower as well as academic ability and preparation to perform as well as they did on the Thursday. As always, it was rewarding to see our students push themselves to engage with the academic content and in social situations in unfamiliar territory. The

Contents

- 1ご挨拶 (マッコレー教授)
- 3ご挨拶 (石渡講師)
- 4YNUメンバーの報告 (日本)
- 14EUメンバーの報告
- 16欧州英語討論会について —よくある質問—
(Euro-Japan Dialogue:Frequently Asked Questions)



universal praise for the YNU contingent was an apt reward for their six months of intense preparation resulting in one week of flawless execution.

Every year, common threads for students include the challenge to use English in various settings, the necessity to research economic topics and discuss them in a mature manner, and the pressure to present themselves appropriately as ambassadors for YNU. However, every year there are also unique elements. This year, it was the need to accommodate the University of Edinburgh students who were presenting in Japanese. In Japan, it is a matter of course that students need to learn to be competent in English. There is, however, less of a realization that when speaking to non-native speakers of Japanese in Japanese, one has to modify one's own Japanese output to a level that matches the ability of the other person. Our students had prepared well for their own use of English, but were perhaps surprised and a little confounded by the challenge to speak a different, simpler version of Japanese. It was, I feel, an invaluable lesson for them.

Collaboration is the key to the success of Euro-Japan Dialogue, and we thank everyone connected to YNU and our European partners for their cooperation thus far. Plans for the 7th Euro-Japan Dialogue are already underway, and we look forward to its continued growth and success.



- 17 ……2011 年度事前・事後講習スケジュール
- 18 ……討論テーマと担当グループ —エジンバラ大学プレゼンテーション内容—
- 19 ……2011 年度実施期間スケジュール —エジンバラ大学・マルタ大学—
- 21 ……欧州英語討論会史
(History of Euro-Japan Dialogue)
- 22 ……欧州英語討論会についてのアンケート結果





2011年度
欧州英語討論会の発展について

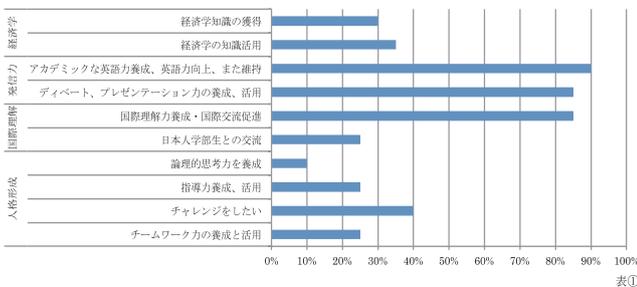
経済学部講師
石渡 圭子

欧州英語討論会の担当者である McAulay 先生がこの討論会について説明をするときによく“evolve”という動詞を使います。確かに英語討論会には“evolve”という動詞が似合います。2003 年度エルフルト大学の訪問をきっかけに経済学部が英語討論会を始め、2005 年まで国内で開催していました。2006 年からは英語討論会を欧州の大学で実施するようになりました。その後も英語討論会は発展し続け、昨年度はアジアでも英語討論会を始めました。特に、2011 年度欧州英語討論会は以下の点でまさに“evolve”を具現する年でした。

1. 単位認定
2. 参加者数の倍増と学外からの補助金
(日本学生支援機構留学生交流支援制度プログラム)
3. 英語力高度化プロジェクトの活用
4. 参加者バックグラウンドの多様化

第 1 に単位認定科目となった主たる要因は高度なプレゼンテーションと積極的な交流により訪問先の大学から高い評価を獲得してきた討論会参加者の功績によるものです。しかしながらその高度なプレゼンテーションや円滑な交流を達成するためには 76.6 時間 (2011 年度討論会参加者平均 (個人学習、グループ学習含める)) もの事前学習が必要でした。このプログラムでは個人の意欲や希望に応じて多岐にわたる学習が可能でず(表①)。しかも学習した内容(知識)をパフォーマンスにより体現しなくてはなりません。これは知識を自分のものにする、つまり理解を深める行為であり、学習の理想の形です。参加者の学習成果に単位が付与されたことは討論会の発展と言えます。

欧州英語討論会参加希望理由



第 2 に参加者定員が今年度 20 名になったことも討論会の発展の一つです。例年 4 月～5 月に参加者募集を開始します。近年、定員を上回る応募があり、討論会の認知度が上がったことがわかります。今年度も定員の約 2 倍の応募があり、5 月下旬に参加者を面接で決定し、6 月から討論会

準備に入りました。その後、日本学生支援機構の留学生交流支援制度に採択され、その支援を受けて 10 名増員ができるようになりました。6 月末の第 2 次募集では多くの学生が関心を示しました。就職が決まった 4 年生、就職活動開始が 12 月になったことから 3 年生も応募してきました。更に、専門的な経済学の知識が必須という点で応募に二の足を踏んでいた 1、2 年生も希望するなど、予想以上の反響がありました。

第 3 に経済学部が実施した英語力高度化プロジェクト活用があげられます。このプロジェクトは全学の学生を対象にし、その目的はプレゼンテーション、ディスカッションスキルの養成にあります。殆どの参加者がこのプロジェクトを活用 (10 回中平均 6.5 回出席) し、プレゼンテーションスキルを切磋琢磨しました。

第 4 に多様なバックグラウンドをもつ参加者 (表②) が増えました。これは経済学部の国際化の表れとも言えます。短期留学経験者、英語討論会経験者、学部留学生など、参加者集団の中で異文化理解を深めることができるほどでした。また、1 年生から 4 年生までの学年を超えた集団は、経済学の知識レベル、英語力、プレゼンテーションスキルのレベルも異なり、まさに学びあうには最適な集団となりました。

参加者バックグラウンド

学年	人数	渡航経験のないもの	短期留学経験者	討論会経験者	帰国生	母国語、英語以外の言語
1	2(学部留学生2)	0	0	0	0	フランス語
2	4(学部留学生3)	0	2	0	0	ロシア語
3	6(学部留学生3)	1	0	1	0	ロシア語 ス페인語
4	8(学部留学生2)	0	2	1	0	ロシア語

表②

さて今年度の欧州英語討論会を省察すると、成功の鍵は参加者の努力にあると言えます。事前学習期間中、ほとんどのグループがプレゼンテーションの内容修正に苦労しました。その甲斐があり、プレゼンテーションは成功し、両大学では好評でした。このようなポジティブな評価は嬉しいものですが、何より参加者が達成感を味わい、それぞれの参加希望理由が満たされ、欧州討論会が有意義と判断されれば (アンケートページ参照)、運営に携わっている者としては歓天喜地と言えます。ネガティブな若者像が跋扈する今日、このように国際理解に努め、向上心を持って意欲的に取り組む学生が参加してくれたことは幸いでした。リエゾン、討論会経験者、またプレゼンテーションを中心になってまとめていったメンバーに感謝します。最後になりますが、事前学習でのパーソンズ先生、引率の萩原先生のご協力、ご指導に感謝します。



YNU メンバーの報告



リエゾンとして

村瀬 俊樹

経済システム学科 法と経済コース4年

私は欧州英語討論会初参加でいきなりのリエゾンだったので、何のノウハウも無く、プログラムが始まる前は大変になるだろうと想像していました。しかし、実際始まると、グループのメンバーや他のグループの人たちともすぐ打ち解けて、楽しみながらやっていくことができました。特に私たちのグループは日本人以外にもモンゴルやベトナム、ラオス出身のメンバーも居て、彼らからそれぞれの国の文化や習慣の話を書くのもまた楽しい経験でした。もちろん大変なこともありました。私たちのグループは「本音と建前」、「高齢化」について調べていましたが、高齢化を調べていく中で2回ほど白紙から調べ直さなければなりませんでした。原因としては、やはり準備不足や、私の見通しが甘かったというのが大きかったと思います。仕切り直しについてはかなり議論しました。気まずい沈黙もありました。でもその時本気で意見をぶつけて、みんな納得して新しい案をまとめることができました。また、悪いことばかりでもなく、朝から晩まで集まって話し合ったり、プレゼンの練習をしたり、当時は倒れるかと思いましたが、これらの過程を通して、チームワークやメンバー同士の仲も深めることができましたし、今ではいい経験になったと思います。

欧州でみんなと再会してからは、毎日のように飲み会をしていましたが（もちろん遊んでばかりではありません!）、プレゼン前日にリハーサルをしようと思ったら、みんなすっかり内容を覚えていて紙を見なくても話せる。こういった、楽しみながらも、仕事を必要十分以上にこなせるのは私たちのグループの強みだと思います。そして、マルタでのプレゼンも無事に終わり、現地の教授の方からも好評を頂き、肩の荷が下りたような安心した気持ちになりました。

私たちのグループができてから、約5ヶ月間、意見が合わなかった時もありましたし、リサーチ等を最初からやり直さなければならぬ時もありましたが、そういった困難を乗り

越えて、チームワークや友情ができ、またそれぞれ個人としても大きく成長できたと思います。私としてもこのグループに所属して、リエゾンという役割を果たすことができ、本当に良かったと思います。

その他

欧州英語討論会には単にプレゼンやディスカッションを通して現地の学生と交流する以外にも、大きく2つの利点があると思います。

1つ目は、欧州を回れること。私は欧州英語討論会の前後を使って幾つかの国を旅行しました。ヨーロッパ各国のテレビや新聞でしか見たことの無い各地の名所を実際に見て回るといっても貴重な経験をする事ができました。また、ヨーロッパ各国を巡るという経験は日本とヨーロッパを比べるという良い機会も私に与えてくれました。

2つ目は、プログラムを通して得た親友たちです。大学に入るとサークルや部活以外での人間関係が希薄になるとよく言われていますが、欧州英語討論会のメンバーや私たちのグループには友情やチームワーク、笑いや感動があったと思います。

今回このプログラムに参加でき、また教授や先生方、大学、文部科学省など多くの方々や機関に支援を頂き本当に感謝しています。そしてこういった機会は学生のうちにしかできないと思うので、是非多くの学生にトライして欲しいと強く思います。



欧州英語討論会から学んだこと

岩崎 重和

国際経済学科4年

今回、私が討論会に参加した理由は、英語での討論会を通して、大学卒業後のキャリア形成に、役立てたかったからです。実際に討論会を体験して、かけがえのない体験をしたと痛感しています。是非、後輩たちにも、積極的に参加して、横浜国立大学と海外の大学との結びつきに貢献してもらいたいです。

今回はスコットランドのエディンバラ大学に訪れました。エディンバラ大学は、1582年に設立された英国で6番目に長い歴史を有する大学であり、スコットランドの最高学府であり、欧州圏を代表する伝統の名門校です。

エディンバラ大学の学生と、エディンバラの伝統的な食べ物を紹介してもらいながら、グループに分かれて、日本人の特徴や日本での生活などを英語で話し合いました。エディンバラの学生は、イギリス、スペイン、イタリア、フランス、ロシア、台湾、中国、など留学生がたくさん在籍しており、このような多種多様なバックグラウンドを持った学生が日本に留学してみたいと口をそろえて言っていたのを聞いて、未曾

有の災害に襲われ、原発の危機にさらされている状況にもかかわらず日本が発信し続ける魅力とは、なんなのかを考えさせられました。ヨーロッパには、原発大国であり、原発への危機意識は非常に強く、ドイツは2021年までに原発の完全廃止を決定したほどです。日本は原発の危機リスクを排除し、日本の文化を伝える必要があると思いました。

ヨーロッパの学生は、日本発信のカラオケや漫画、アニメ、アイドルに高い興味を持っており、その興味から日本語の美しさに魅了される人が多いように感じました。日本語に触れてもらうきっかけとして、これらの娯楽文化は非常に有効だと考えられます。しかし、今回ヨーロッパの国々の町、空港、ホテル、デパートなど数あるところに、日本の経済を支えてきたはずのテレビや電子機器が韓国のサムスンやLGの製品であふれており、日本の製品はほとんど目にしませんでした。韓国はまさにグローバル戦略を勝ち抜いていると考えられます。このことは、文化にもいうことができ、韓国のアイドルグループの世界的な進出は、目を見張るものがあります。実際に、ヨーロッパの学生の多くが、韓国のアイドルグループのことを知っており、日本の文化について話している際にも、話題に上ることが多いです。韓国のように、ヨーロッパでもグローバルに成功を収めているのを痛感しました。このような、グローバルな活動の必要性を実際に体験できたのは、非常に貴重かつ有用であったと感じました。



欧州英語討論会

原 崇宏

経済システム学科 法と経済コース4年

準備期間を含めて4、5ヶ月にわたる当プログラムを経て、様々な成果・経験を得ることができましたが、その中でも非常に貴重なものは以下の2つです。

1つ目は、普段の学生生活では得がたい友人を得ることができたことです。当プログラムに参加することで、多くの留学生、留学や海外勤務に興味を持つ日本人学生、訪問先の大学生と友人になることができました。サークルやアルバイト中心の交友関係では決して出会うことはなかったと思います。そして、そういった海外への視点を持った友人たちは国内志向の強かった私にとって、非常に強い刺激になりました。実際、準備期間のミーティングなどでは、ずっと日本にいた私よりも、留学経験のある日本人学生や留学生の方が日本という国家像や国柄を正確かつ客観的に捉えている場面がしばしばあり、悔しい思いもしました。日本から出て初めて、日本についてわかることがあるということを感じました。来年から社会人になりますが、地方公務員として働くので、おそらく国内から出る可能性は非常に限られていると思います。しかし、世界の中で日本を捉えるという視点の重要性を肝に銘じながら、チャンスがあれば、国際交流にまつわ

る業務などに挑戦していきたいです。こういったモチベーションを与えてくれる友人ができたことは、非常に貴重なことでした。

2つ目は、そういった友人と日本の文化、政治経済、社会について、時に国際的視野や英語を交えながら、真剣に議論する機会を得ることができたことです。これまで、講義中心で履修してきた私にとっては、答えのない課題に対して、グループで議論し1つの結論を出すことは、非常にやりがいのあるものでした。メンバー1人1人が強みを生かして、議論に積極的に参加したからこそ真剣になれたのかもしれませんが、留学生のおかげで内からも外からも日本を捉えた深い議論が可能になりました。一方で、私は講義で得た専門知識を現実に応用することで結論を専門的にサポートすることができました。その結果、日本人同士で起こりうる協調による意見の集約ではなく、議論による意見の洗練が可能になりました。何度も何度も議論しては、修正するという繰り返しでしたが、充実した時間を過ごすことができました。

このような貴重な体験は残りの学生生活、今後の職場でも必ず活かされると思います。英語に対し苦手意識を持っていましたが、このプログラムに参加できて本当に良かったです。



欧州英語討論会報告書

森脇 啓太

国際経済学科4年

今回の欧州英語討論会では、エジンバラ大学とマルタ大学を訪問し、お互いの学生がプレゼンを発表し、交流しました。エジンバラ大学では日本の文化について、そして、マルタ大学では高齢化社会について、意見を交換し、海外という視点からこれらのことを見つめることができたと思います。

特に印象に残っていることはマルタ大学での高齢化社会についての意見交換です。日本では、高齢化社会で問題となる労働者不足を補うため、移民政策が有効なのに対し、マルタではそうではないということを知りました。マルタ大学の学生と意見を交換するまでは、マルタはEUに加盟しており、むしろ日本より、移民政策は効果的なのではないかと考えていましたが、意見を交換したあとは、それは間違いだということに気づきました。マルタは横浜市より小さな島国で、主な産業が観光業という国です。また国境検査をなくすシェンゲン協定を欧州各国と結び、EUにも加盟しています。多くの有能な移民労働者は魅力的な仕事の多いドイツやフランスといった大国に流れ、マルタは移民労働者を惹きつけられないというのが理由で、労働者不足を解決する手段として移民政策が効果的ではないとマルタ学生は話していました。

この意見交換を通じて、日本で移民政策が有効な裏には、

日本には移民労働者が働きたいと思えるような仕事があるということに気づかされました。また、同時に、それらを失うと、将来的に移民労働者が減る可能性が高く、労働者不足に陥るとすることも感じる事ができました。

さらに、マルタ学生の話聞いてみると、日本の地方圏も同じ状況なのではないかと感じました。EUに入っているため、マルタから逆に労働者流出が起きやすい点は、日本の地方から都市への人口流出と重なる点が多いように感じます。マルタ大学生が話した高齢化社会による労働者不足を補う方法は日本の地方自治にも生かせるように思いました。

このようにこの討論会を通じて、全く立場が異なる学生と話すことで、今まで気づかなかった点に気づくことができました。移民が入ってくることは当たり前のように考え、移民労働者が入ってこない、逆に労働者が海外に流出してしまうような状況など、考えたこともなかった私はこの欧州英語討論会でいろいろな人に出会い、違った考え方を学ぶことができたと思います。



2011 年度欧州英語討論会報告書
～ Presentation & Discussion in Malta ～

岡地 雄生

経済システム学科4年

私はマルタ大学で「高齢化社会」をテーマにプレゼンを行った。当日は、数名のマルタ大学の学生と教授も出席なさり、教授は高齢化社会の専門であったため実際にプレゼンも行なって頂けた。プレゼンは横浜国大から2グループ、マルタ大学から教授と学生グループの計4グループの発表であった。メインは学生グループのもので各20分でプレゼンを行ない、その後10分程度の質疑応答が設けられていた。まず一番最初にマルタ大学の学生によるプレゼンが行なわれた。内容としては世界的な高齢化社会の状況について触れて、その後マルタにおける高齢化の進行についてグラフやデータを使って説明をもらった。マルタにおける高齢化社会による雇用問題も取り上げており、マルタについてほとんど知らない私にとっては聞くこと全てが新鮮で驚かされることばかりだった。特にマルタという非常に小さな国でも高齢化が進んでいる状況を知ることによって世界的な高齢化社会の問題を肌で感じる事ができた。次に横浜国大のメンバーの発表が行なわれた。日本は世界でも特に進んだ超高齢化社会であることを冒頭で説明し将来的に人口減少に陥る可能性があることをグラフを用いて説明し、この問題の解決策の一つとして移民を取り上げていた。日本有数の大企業では国際化を進めており、その中で外国人の採用を積極的に行なっている事例を上げていた。しかしながら日本はビザを取得するのが難しく、移民の受け入れ態勢が未だ整っていない現状にも触れていた。質疑応答では様々な質問が両学生から出て議論は非常に白熱し、良いプレゼンだった。そして最後に私の所属するグループの発表だった。冒頭で他グループ同様

日本の高齢化社会の現状に触れ、次になぜ日本が世界トップクラスの高齢化社会なのかについて述べた。その中の一つとして前のグループの取り上げた移民についても挙げ、その他に世界では専業主婦の割合が少ないこと、そして年金受取の年の引き上げを挙げた。次に日本の農村部での高齢化の深刻さについて取り上げて、その中で引き起こされる問題として「買い物弱者」「孤独死」を中心にプレゼンした。私たちのグループは高齢化社会を解決するのではなく高齢化社会に適応する生き方も求められるという結論を伝えたかったため、上記で挙げた二つの問題を解決する地方政府の動きなどをメインにプレゼンをした。

私は、各グループが同じ高齢化社会というテーマでも全く異なるプレゼンを行ない非常に新鮮に感じ結果的に良いプレゼンにつながったと感じた。実際、マルタ大学の教授のコメントの中でも述べられており評価も得られたことに満足している。また、自分達のプレゼンは日本の農村部の現状というなかなか触れないところを深く掘り下げて発表したのも、オリジナリティが出せたと思う。これも渡航前のジェニファー先生の細かな指導やリハーサルでの石渡先生の適切なアドバイスがあったからこのような良いプレゼンが出来たと感じている。卒業前にこのような英語でのプレゼンを本格的に行なえた経験は必ず社会人になってから役に立てたい、そして是非生かしていきたい。



**欧州英語討論会
準備から学んだこと**

西浦 里彩

国際経済学科3年

今回の欧州英語討論会ではエジンバラ大学で「文化」、マルタ大学で「高齢化社会」についてのプレゼンテーションとディスカッションが行われました。最終的には1つのチームが1つのテーマを発表することになるのですが、準備段階ではすべてのチームがコンペティションにむけてこの2つについてのプレゼンテーションをつくり、その後先生方からそのチームの最終的なテーマが決められました。

私は追加募集で討論会への参加が決まったので、7月からこの2つのテーマについて調べるようになったわけですが、私にとってプレゼンテーション自体が初めての経験だったので、最初のうちは何から始めたら良いかわからず、とにかく自分が割り当てられた部分を完成させるということばかり考えてしまっていました。そして迎えたコンペティションの日、この日初めて他のチームのプレゼンテーションをみたのですが、自分達のチームとしてのプレゼンテーションの一貫性のなさ、そして自分の勉強不足を痛感しました。すぐ後にメンバーのみんなと反省会をしました。そこでは、他のチームのメンバーからも沢山のアドバイスをもらい、わからないことを教えてもらったりもしました。そしてこのままではいけないと思い、その日のうちに再調査を始めました。結局私た

ちのチームは「高齢化社会」について発表することになったのですが、この時には「文化」だったらこんなテーマが面白そうだったなということも考えられるようになっていました。テーマが一つに決まってから、先生方や他のチームのメンバーのアドバイスをもちに、チームのみんなとプレゼンテーションを改善していきました。一番言われたことは、プレゼンテーションを通して伝えたいことを明確にしなければならないということでした。私たちは「日本のミクロ的政策」に焦点をあてることにしたのですが、これが決まってからは、プレゼンテーションも以前よりわかりやすくなり、ミーティングでの意見交換も活発になっていったと思います。そして最終的には最初のものより格段に良いプレゼンテーションにすることができました。

欧州英語討論会は自分にとっては準備段階から初めての連続(なにしろ海外に行くのも初めてだったので…)でした。しかしその分学んだことも大きかったと思います。今回自分の力不足を感じたこともたくさんあったけれど、次に繋がる素晴らしい経験ができました。そしてまた、優秀で意識の高いメンバーと出会えたこと、そんなメンバーと共に討論会に取り組めたことも自分にとって良い刺激になりました。このような機会を与えてくださった先生方、協力してくださったみなさん、本当にありがとうございました。



2011 年度欧州討論会報告書
エディンバラの地方自治体、マルタ大学を訪れて

山田 芳裕
国際経済学科3年

日本は豊かで素晴らしい国である。まず、最初に私が英語欧州討論会を経て、感じた率直な感想です。海外に行くことと祖国の良さを痛感するとよく言いますが、私もその事を強く感じました。今回の報告書では、以上の事を私に痛感させるきっかけとなった、エディンバラの地方自治体とマルタ大学訪問について書きたいと思います。

11月7日14:00 私達はエディンバラにおける地方自治体を訪れました。そこで、エディンバラの歴史、歴代の議長の名前、今取り組んでいる事など、たくさんの事をお聞きしました。その中でも私が一番心に残っているお話は、エディンバラにおける環境汚染のお話です。エディンバラには地下鉄がありません。主な交通手段は、バスと車です。そのため、必然的に車から立ち上る排気ガスによって、環境が汚染されていきます。現在地方自治体では環境に優しい路面電車を街全体に走らせる計画を立てていますが、予算の問題で政府から許可を得ることはできていません。この状態が後数十年は続らしいです。

この事から、電車社会である、日本は環境汚染の少ない素晴らしい国であるなあと感じました。

次に11月10日私達はマルタ大学を訪れて、大学についてお話を聞きました。マルタといえば地中海というきれ

いな海を持つバカンスに最適な国と言うイメージがありますが、その現状は悲惨なものです。まず、第一にマルタには資源がありません。第二に工業製品がありません。そのため、マルタではヒューマンリソースに重点を置き、教育に力を入れています。その重要な役割を果たしているのが、マルタ島唯一の大学であるマルタ大学です。マルタ大学ではこれから伸びてくるであろうITやコンピュータ技術に力を入れて、次世代を担う若者を教育しています。しかしながら、それとは裏腹に、大学で技術を身に付けた学生が高賃金や条件の良い仕事を求め、海外に流出するという問題が起きています。この事から、工業製品に恵まれ、強力な企業をたくさん持つ日本は豊かで素晴らしい国であると感じました。

この英語欧州討論会を通して、異国の情勢について深い知識を得て、日本の国について深く考えることが出来た事は私にとって、とてもいい経験になりました。日本と言う好条件の国に生まれる事が出来た幸せを最大限に活かしてこれからの人生を歩んで行きたいと思います。最後になりますが、私にこの経験を与えてくださった、先生方、大学、文部科学省の方がたに心から感謝の気持ちを述べて終わりたいと思います。本当にありがとうございました。



プレゼンテーションについて

李 貴愛

経済システム学科 法と経済コース2年

今回の欧州英語討論会では、私は追加募集で参加しました。なので、そのころにはもうトピックも決定していて、与えられた「Aging Society」「Women's role」という2つのトピックの、その範囲の広さに最初は若干の絶望を覚えつつも、7月の後半からグループメンバーと準備を始めました。最初に「範囲は結構限定してもいい」と言われたので、「Aging Society」では高齢者雇用について、高齢者の意識調査(何歳まで高齢者は働きたいと思っているか等)、日本の雇用体系、企業側の事情などを盛り込みプレゼンを、「Women's role」では女性の役割を主に育児の観点からプレゼンすることにしました。そして、最初からいたグループの人たちには時間は劣るかもしれませんが、何回も何回もミーティングをしてなんとか Competition 前にプレゼンを仕上げました。

そして、Competitionの結果、私たちはエディンバラ大学で「Women's role」のプレゼンをすることに決定しました。これが決定した時点では、私たちは女性の役割というもの、「女性の役割は多様化していく」というとてもありきたりな結論にまとめ、その結論の過程も、とても一般的なことしか言っていませんでした(昔の女性の立場や現代の女性の意識調査、海外との比較など)。そして、一つのトピックを掘り下げることをしていませんでした。

それを English lesson の Jennifer 先生に指摘されたのが、早い人はもう出国まで2週間しかない10月の半ば。ショックを受け、翌日全員で集まり、3日後に控えるリハーサルを前に、アドバイスを参考にして、プレゼンをほぼ全変更してしまうほどでした。それほど、自分たちのプレゼンは底が浅かったのです。しかしそこで軌道修正ができ、良かったと思います。

結果、私たちは、「現代の女性にとって育児は負担であるか、ないか」という切り口で、さらに日本に限定し、軸がぶれないよう、日本の女性のライフスタイルの変化や、「パパママ育休プラス」、「イクメン」など、徹底的に日本の制度等を紹介、分析しました。おかげで、最後はずいぶんすっきりしたプレゼンになったと思います。

これは反面教師にするべき例かもしれませんが、このようなことがおこることもあります。自分たちがやってきたものを根底から変えざるをえないこともあります。あるいは、なかなか終着点にたどり着かないこともあります。発表の前に緊張で胃が痛くなることもあるかと思えます。しかしそれも全部乗り越えたら、次、どこかでプレゼンをするときに何をすべきなのかちょっとずつ考えられてくるし、最後にはきっとみんなで思い出話に出来ると思えます。



Euro-Japan Dialogue

ゴンチグスレン エンフサイハン

国際経済学科2年

今年の欧州英語討論会のテーマは最初から経済と日本文化という二つの分野に分かれていました。私たち欧州討論会のメンバーは四つのグループに分かれて、二つのグループは経済の論点から、“Aging Society”についてマルタ大学で発表し、残りの二つのグループは日本文化「KY(空気が読めない)」と「女性の役割」について、エディンバラ大学で発表することになりました。私はKYについて発表するグループに入っていました。

私のグループは国際的なグループでベトナム、モンゴル、カンボジア出身の四人の留学生とたった一名の日本人学生から構成されていました。そこで、日本文化について論理的に英語で発表し、エディンバラ大学の学生に正しく伝えるのに、たくさん情報と資料を収集することが大事でした。しかし、KYという言葉は最近の流行語で、KY自体に関する資料があまり入手できませんでした。

グループで話し合った後、エディンバラ大学の学生たちは日本語を専門に勉強していますので、KYという言葉を生んだ日本文化と歴史的な背景、流行になった原因、日本語の特徴についても発表の内容に入れることにしました。私のグループはKYというテーマについてプレゼンテーションすることが決められてから、グループ全員が一カ月ぐらい本格的

に調べ、調査を行いました。グループで集まり、話し合い、面白い意見を交換し、メンバーとしての役割を果たしているうちに、良い仲間になりました。前に述べたように、私のグループの四人が異文化から来日し、日本文化についてあまりわからないので、完全な発表ができるかと疑問を抱きました。しかし結果として、多様の観点から考察すると、本番では良い発表ができたと思います。

次に、欧州英語討論会が与えてくれた機会について話したいと思います。私の専門は国際経済ですが、英語によるコミュニケーションスキルと国際理解は常々重要と考えていました。それを養成するためにも、欧州討論会に参加したいと思いました。欧州英語討論会を通じて、異文化に接することができたし、たくさんの面白い人と会うことができました。英語でネイティブの学生と話すことができたのも、良い経験、良い思い出となり、多くのことを吸収することができました。その機会を与えてくださった石渡先生、Parsons先生、McAulay先生に感謝の気持ちでいっぱいです。



As a Liaison

Kazuhisa Takagi

Economic Systems-3rd year

I took part in Euro-Japan Dialogue 2011 as a liaison. Giving a presentation in English is certainly difficult, but moreover I found making a persuasive, steady presentation as a whole group to be very difficult and challenging. This is because it was first time for me to play a role like team leader and unite team members and motivate them. I learned that it was not so easy to unite just five members.

At first, everyone in the team, including me, was a little passive. The meeting was not exciting, but dull. When I allocate tasks to team members, there were many times the tasks were not done well, or sometimes nothing was done. I was guilty, too, saying I was busy with other things. The morale as a team was low. At one point, we could not find a good argument for the presentation or prepare well for the intermediate rehearsal.

As a result, our presentation was not good. It was boring. We felt other presentations were much better and realised how weak and fragile our presentation was. After the presentation on that day we asked other teams for advice and determined to give a better presentation than other groups and the European universities.

I thought our presentation changed so much after that day. We decided on a strong, unique argument in the presentation. We were all convinced of our argument, so our bond became stronger. Our motivation became higher. As a result, every member said that we should practice more and prepare more.

Through this experience, I learned not only the difficulty of uniting a team but also the fun of creating one thing as a group. That was what I felt when our presentation finished at University of Malta. I was able to learn many things and meet many people through this program. I want to thank you all who supported our program. This experience is my treasure.

	<h2>Euro-Japan Social Events</h2>
	<p>Thongxay Souvanmany</p>
	<p>Economic Systems -4th year</p>

I participated in Euro-Japan Dialogue 2011 and will briefly describe some of the social events we were able to participate in.

My first impression was the warm welcome by teachers and students of University of Edinburgh. We met for just a short period, but I think I became really acquainted and felt comfortable with them because of the friendly discussion we had both during presentations and socially. We were offered a lovely dinner which had a variety of food and traditional tea that I love. And I still remember, after the dinner, Edinburgh students led us to a pub and we made a team called 'YNU team' trying to answer general knowledge questions related to the United Kingdom competing with other customers in pub quiz. Although we were eliminated in the 2nd round, everyone concentrated on the questions and had animated discussions before answering the questions. I think this opportunity gave everyone more chances to share our ideas and also improve our communication.

A few days later, we met with kind consideration from the staff and students of University of Malta. The staff and students displayed how to professionally welcome guests. I felt we could do many things during the short period there because of their support and organization. The last day at the farewell party a number of Maltese students came and everyone had lively conversations

during the party. I have learned that Maltese people love talking. You just ask them a question such as, 'Why is the Malta population concentrated in such a small area?' and you will hear lots of information and history about Malta, because people who live in Malta are usually talkative, active and they are so friendly.

In conclusion, I myself was absolutely satisfied with this program. To learn about and experience two cultures at some level in just a week is something wonderful. So I personally recommend all students to participate in this program. The unforgettable memory will remain with you forever.

Finally, these kind of valuable opportunities only occur because of support from Monbukagaku-sho (MEXT) and also the staff who are in charge: Professor Alexander McAulay, Keiko Ishiwata sensei, Craig Parsons sensei, and others who support us from the beginning until the end of the program.

	<h2>Euro-Japan Dialogue 2011 Report</h2>
	<p>Yoshimi Tsukada</p>
	<p>International Economics-4th year</p>

My group presented at University of Edinburgh and theme was "Reading the Atmosphere (RA)". The content covered a wide area: The meaning of 'KY' and the importance of the atmosphere, the relationship between RA and Japanese culture and communication style, Recent background of RA, and A survey on RA. In our conclusion, we maintained that today the atmosphere is becoming more complex because of the change of Japanese society and globalization. Therefore, understanding the atmosphere is important. Moreover, we insisted that it is essential not only to understand it, but also to react to the atmosphere accordingly and independently.

We think now-Japanese pay less attention to reading the atmosphere. Therefore, even though the audiences have studied Japanese culture, it seemed difficult to make them understand reading the atmosphere or Japanese character clearly. We approached the topic carefully. Actually, at first, I did not notice how much Japanese people care about the atmosphere compared to non-Japanese because I am Japanese. While researching

on reading the atmosphere and Japanese culture, I got to know how important it is to read the atmosphere for Japanese people. However, this was emphasized when I discussed it with my group. All the rest of the group are international students. It was really helpful to know what they think about reading the atmosphere. When we were discussing the theme, their opinions were sometimes perspectives I had never thought of. They made me notice that what I take for granted was not necessarily a common thing. Also, their national backgrounds are varied. We could compare the way people read the atmosphere in each country. Thanks to them, we could present the topic from various aspects, which made the audience in Edinburgh understand it clearly.

It is obvious that Japanese society is getting more complex and global from the fact that many of the members of this cohort were international students. Therefore, we care to pay attention to the atmosphere not only among Japanese people but also among people from various backgrounds. Now is the time to recognize that Japanese people read the atmosphere too much and there is a variety of ways to communicate with people without caring about the atmosphere a lot. I could learn this through Euro-Japan Dialogue.

	As a Liaison
	Odonchimeg Gerelt
	International Economics-4th year

It was my first time to participate in Euro-Japan Dialogue. First of all, I am very grateful to the professors and staff and to my fellow students. We have been preparing our topic since July and not only students but professors and staff were working very hard to bring success to this programme.

I was selected as a liaison and our group topic was "Reading the Atmosphere". Except for one student our group was international students and our goal was introducing Japanese culture to University of Edinburgh. It was big challenge for us: even if we understand what "reading the atmosphere" is, to explain this topic was very difficult. As an international student, I thought

"reading the atmosphere" is a very strange thing and never tried to understand why it is so unique to Japan. But while researching and discussing it with my group members, I realized that "reading the atmosphere" is the unique culture of Japan and began to understand things that seemed to me very strange. It was a really great and new experience to understand Japan more and more. My group members and the only Japanese student, Yoshimi Tsukada, were a great help to me. Yoshimi explained lot of things about "reading the atmosphere". Also, she had participated in the previous Euro-Japan Dialogue and gave us a lot of hints on how to prepare our presentation and what questions should be expected from other students. Not only her, but our other group members were very capable and reliable so I didn't feel the pressure of being a liaison. But when we decided what to present or not, our ideas were quite varied and different, and I thought as a liaison I should make the final decision. It is a difficult but expected duty of a liaison. I am very happy that I had such a great opportunity to participate in Euro-Japan Dialogue.

	Euro-Japan Dialogue 2011
	Quynh Tram Nguyen
	International Economics -3rd year

I think I was very lucky to take part in Euro-Japan Dialogue 2011. I gained lots of precious experience and knowledge from this event.

From the preparation, I could have chances to gain more economic and cultural knowledge in English, exchange ideas and learn many good things from other members in the group such as the positive attitude in discussion. We spent a long time discussing about the ideas for the presentation, we also spent time reading books, researching online and even making surveys. Furthermore, as preparation for the presentation, we had the English discussion class with a teacher, Jennifer, every Wednesday. Thanks to this class, I could enhance my presentation skills such as how to express ideas logically, combine voice and gestures to convince the listeners and be calm when answering questions.

In the formal Dialogue in Edinburgh and Malta, beside the academic discussion time, we spent lots of time talk-

ing with students from those universities. I was surprised by their hospitality. I have plans to study abroad in Europe after graduating the bachelor course, so it was a very good chance for me to ask students directly about European lifestyle and the study environment. Especially, in University of Malta, meeting students who study hard and have broad knowledge about economics made me more motivated to study.

It is no exaggeration to say that participating in Euro-Japan Dialogue 2011 has been the most wonderful experience of my university days. Through the Dialogue, I got many new friends that will form a very important network for my present and future life. I had unforgettable memories in beautiful European countries and I could widen my knowledge not only in study but also in communication and life experience. Thank you to all the teachers and supporters for giving me this wonderful opportunity.



Euro-Japan Dialogue 2011

Munkhbat Batsaikhan

International Economics -3rd year

Before traveling to Europe, we spent a lot of time on the preparation of our presentation. We even changed our content at the last moment, which was the best decision that we made. Later, we were told that our presentation went very well and we could impress the Malta side by our organized delivery. The most valuable lesson for me was from that decision on some changes in our presentation that we made right before our departure for Europe. Being determined and confident is a very important thing that one has to have even at the last moment.

In our presentation we went through various articles referring to ageing issues and their effects on the whole of society. The process of studying academic writing taught me valuable lessons and gave me motivation to continue my study and take it to the next level as an undergraduate. As we look back to the beginning, more than half a year has passed since our first meeting. Although time passes unbelievably fast, if you use that short time fully and efficiently, even six months and all that happens in that time is more worthy than the time we waste run-

ning errands. I want to recommend to students of the Faculty of Economics to participate in this program and bring new ideas which can help in the development of Euro-Japan Dialogue.

One simple thing that stayed in my mind was, the Malta side did not see ageing as a problem. It is viewed as a challenge for every country that is trying to step forward, as pointed out by one of the professors of University of Malta. They refuse to label it a problem - an issue would be a better phrase for it.

Comparing the working population of Europe and Japan, we can conclude that "Ageing" is a big issue in both places. To deal with it we need to have dynamic young minds that can develop on the solid foundation already laid by the older generation. So this issue, in due course, should be regarded as a matter of public policy, which can perhaps be pursued by next year's EJD students.



Presentation and Discussion

Vatanak Lim

Economic Systems-3rd year

In my opinion the Euro-Japan Dialogue 2011 went very well, in terms of both the presentations and the discussions. In Edinburgh, my group gave a presentation about KY (空気が読めない). The Scottish students were very interested in that, and they wanted to ask us a lot of questions. But because we didn't have so much time for the questions and answers part, our discussions were moved to later when all the groups finished their presentations. And when the time came for discussions between Japanese and Scottish students, they did talk a lot about their experiences here in Japan, because some of them had been here before. They told us that they were very shocked by how strong the sense of KY is here in Japan. I remember one of them told us that one of her friends was shouted at by an old lady when she ate a piece of sandwich in the train. She said that she couldn't understand that, because in Europe, they can do almost anything they want in the train, from talking on the phone to eating. After further discussions, they somehow understood the differences between Japanese culture and

European culture.

In Malta, before all the students started their presentations, Dr M. Formosa, a Gerontologist from the European Centre for Gerontology, gave a speech about 'Global Challenges in Population Ageing' to give all the students some ideas about ageing problems in the world. After his speech, the YNU students presented first. I could feel how much effort they had put into the presentations after hearing it. The presentations were informative and very analytical. After the presentations, we didn't have much time for discussions, but Dr E. Warrington, the Head of Department Public Policy, gave a very good evaluation of our presentations.

	<h2>Euro-Japan Dialogue 2011 Report</h2>
	<p>Soojeong Choi</p>
	<p>International Economics -2nd year</p>

International exchange is one of the reasons why I wanted to participate in Euro-Japan Dialogue. I thought I could make more Japanese friends. As it is, in this program there are also lots of other international students from all over the world. Therefore, I was able to make more personal connections with more nationalities than I expected even before departure. Also, as the topics for my team were Aging Society and Women's Roles, I could expand my economic knowledge.

The Dialogue was held in University of Edinburgh and University of Malta. University of Edinburgh has a Japanese Department, therefore our presentation was in English and theirs was in Japanese. Our team presented about Women's Roles there. We thought child care is essential when it comes to activating women's roles. Therefore, we thought by reducing the child care burden we could diversify women's roles. The day after we presented, the University of Edinburgh students presented their topic. We were surprised by their fluent Japanese. Especially, the college seniors who have already studied in Japan for a year had very accurate intonation.

Next, we visited University of Malta. Malta is a very unfamiliar and small country. In Malta, there is only one university which is University of Malta. They prepared lots of things for us. One of the professors gave us a guided tour of Valetta. He knows the history in great detail and we could feel his pride in his country. University of Malta students also gave a presentation about Aging Society. At the beginning of their presentation,

they were introducing Malta and it was interesting, because it reminded me how small a country Malta is. The Euro-Japan Dialogue ended in Malta. It was such an honor to participate in this program. It will remain forever in my life as a major event. I am very grateful for these wonderful experiences.

	<h2>Euro-Japan Dialogue</h2>
	<p>Thi Ngoc Anh Nguyen</p>
	<p>International Economics - 2nd year</p>

As part of the 6th Euro-Japan Dialogue, our group presented about the topic "Aging Society" at the University of Malta. The days of preparation for our presentation were truly memorable, and I have learnt much about teamwork from the experience.

We decided the outline with five main points before entering summer vacation. However, on our first meeting after summer, after discussing all our research, we found out our content covered too much and lacked a main point, and our argument lacked coherence. For the first time I became aware that "connected items" do not always make a good presentation, and you have to think about the flow of a presentation carefully, especially when you work in a group. Unfortunately, we only had a week to reconstruct and complete our presentation. We had to compete against other YNU groups for the privilege of presenting in Malta, and the competition was seven days away.

We met almost every one of those days. The content was re-shaped drastically. We all felt stressful, however, it turned out to be a good memory about how we worked with each other, about how one came up with an idea and the others fleshed it out. We even told jokes and had lots of funny stories at that time.

After winning the competition, we had to present to our English teacher so that she could correct our English. However, she commented that our presentation had too much content. She encouraged us to focus on what we wanted to say. Everyone was worried. We got lost in the question of changing or not changing the content, because we ran out of time. Because everyone had their own schedule; we only had two weekends to make a re-focused presentation.

We decided to change the presentation. When someone found interesting data or items, they sent it to the group by email. Other people read it and found out the information they needed. On the final day, we gathered at 10 AM, discussing, making the PowerPoint and pre-presenting until the presenta-

tion started at 5 PM.

I can't say if we had a successful presentation in Malta or not, but I'm sure we had the best experience with regard to teamwork. I want to give my gratitude to all our professors for giving us a great experience and supporting us so much. And I want to give my thanks to my companions - thank you for "our great co-operation".



Presenting on 'Ageing Society'

Attila Nyikes

International Economics -1st year

The assigned topic to our group was the topic of "Ageing Society". After months of thorough preparation, we presented our topic at the University of Malta.

In our presentation, we gave a brief introduction of the problems caused by Ageing Society in Japan, such as the issue of the decreasing active labor force, the unsustainable pension system, and the growing elderly population. Then we argued about various countermeasures that are being taken and about those that should be taken to solve these problems. We concluded that the orthodox macro measures, which are widely used today by most countries struggling with such problems, are not really effective. Therefore, in our presentation we rather concentrated on micro measures implemented at local level, and argued in favor of the enforcement of such policies. These micro policies would not be designed to solve the basic problems that cause the so-called phenomena of Ageing Society; namely the low fertility rate and the longer life expectancy; as it was in the case of macro policies. Instead, the aim of such micro policies would be; making communities adapt to the changing ageing structure, and try to cope with the existing problems from such a new "perspective". To illustrate this new "perspective", we also discussed some concrete problems being present in many communities at the countryside; such as solitary death, shopping desert, and then the countermeasures; such as community buses, and various welfare services. Out of the many local communities in Japan, which are trying to overcome such problems by implementing micro policies, we introduced one city, the city of Kamikatsu, in details.

All in all, we think that such micro policies form the key in overcoming the problems caused by Ageing Society. However, we should not forget that Ageing Society itself is not the problem. We should accept that this is a new phase in our "social evolution", in the history of the developed countries. Neverthe-

less, it poses new challenges, problems what we should solve while keeping in mind this new "perspective".

Considering Ageing Society, and proposing solution to the problems caused by it from such an unusual perspective was really challenging. Especially, during the time of the preparation, we had many difficulties. But we received many good comments and advices from our teachers, so at the end, I think we could hold a good presentation at the University of Malta.

At last, let me say thank you to all of our teachers for their support and work during the whole program. I studied a lot, and gained many wonderful experiences during this program. I think that the participation in this program was definitely an unforgettable and wonderful experience for all of us.



Preparation of the Presentation

Oyundari Gerelt

Economic Systems -1st year

The 6th Euro-Japan Dialogue took place in November, 2011. After learning that this program was recruiting 10 more students, I decided to participate.

At the first meeting, we divided into two teams depending on which topic interested us. My team's culture topic was 'Women's roles' and all teams' economic topic was 'Ageing society'.

The five of us in the team had many different ideas and thinking about our topics. Therefore, deciding what we want to focus on was really difficult. After discussion, we decided on 'Women's role in childcare in Japan' and 'Ageing society - employment of elderly people in Japan'. But our real challenge was how to explain what is the real situation in Japan and why it is happening.

We did many hours of research and discussion to make it easier to understand others. In my opinion, the group meeting was one of the important keys to completing our presentation. As an international student I didn't know many things and others would notice some interesting points while explaining to me. We did research during group meetings if there was something we didn't know or wanted to check. It really helped me a lot to understand Japanese society more and see it from a different point of view.

After a competition, it was decided that we would present our cultural topic 'Women's role' at The University of Edinburgh. I am grateful for comments and criticism from professors and other students which helped us to improve our presentation

and also 'mature' as presenters.

After months of preparation, the actual presentation finished in 20 minutes. For me, it was the 'fruits of effort' which will definitely grow bigger in the future. Participating in this program helped me deepen my international understanding and proved a really enjoyable experience. Thank you The University of Edinburgh, The University of Malta and YNU for everything you have done for us.



EUメンバーの報告

Kathryn McDonald

University of Edingburgh,2011

私のグループのテーマは「日本のムラ社会」であった。そういうテーマについて、「内と外」やクラブとサークルの中の関係で発表した。

まず、私は発表の準備を始めたときには、ムラ社会のことを分からなかった。実は、このテーマは選びたくなかった。むしろ、日本宗教のテーマで発表したかった。でも、はじめてみたら、驚くほどにとっても面白かったと思っている。私たちのグループでは、アナと私の二人は別々に自分の担当の発表原稿の部分を書いた。私は南山大学で、よく会話文を書かされたから、今回も楽しく書くことができた。

発表の前に、私はとても心配した。ちょっと落ち着くために、スクリプトやコンピューターの準備に時間をかけてみたけど、あまり役に立たず、緊張したままだった。四年生や二年生だけではなく、横浜国立大学の日本人学生と先生の前で発表をすることになっていたので、話すことを思い出すのが難しかった。しかし、話し始めた後、どんどん楽になった。一人だけじゃなくて、クラスメートと一緒に発表したのだから、怖くなくなった。時々、長い言葉でどったり、何度も原稿をそのまま読んでいたところもあったが、それでもちょっとはうまくいったと思う。私は、発表はともいやかなことだけど、その発表を楽しくすることができた。

発表の後の質問の時に、私は答えるのが下手だったと思う。講義室は大きくて、マイクはちょっと静か過ぎて、質問した人が何て言ったか良く聞こえなかった。これは特別なヨーロッパと日本の交流イベントだったので、他のグループが別日に発表した時のように、二年生とグループディスカッションはできなかった。代わりに横浜国立大学の学生と話した。とても楽しかった。横浜の学生は親切で、話しやすかった。もっと面白い話があって、ムラ社会について日本人の学生の意見を聞けるのは有益なことだと思った。何人かの学生は、「ムラ社会」という言葉を知らなかった。

たぶん、これはいい資料が見つけれなかったからだろう。

私は発表をするのが怖くて、苦手である。そのため、皆の前で、注目されて、とても恥ずかしかった。発表の時にはそれがちょっと分からなかったが、四年生、二年生、日本の学生も楽しんだということで、良かったと思う。そして、いい経験になったと思った。

Tess Kellam

University of Edingburgh,2011

発表は日本の男らしさ・女らしさについてであった。題材は面白いとは思いますが、それまで私は別に興味をもっていなかった。欧米の立場から言うと、男女平等は大切なことで、どちらも同じ仕事をしてもいいし、女性の給料は男性のと比べても、等しいものである。それでも、自分は将来結婚をして、新しいカーテンを買ったりする主婦になりたいものである。けれども、子供のためには、父はイクメンの方がいいかもしれない。

反対に、志望の仕事につける可能性がなければ、生き甲斐もなくなるかもしれないので、女性にもそのチャンスを与えることは重要だと思う。その上、男女平等に関する法律が成立されたのはいいことだと思う。例えば、セクハラが違法になったこともである。だが、肉食系女子はちょっと怖いかもかもしれない。「君はペット」と言うドラマを見たが、それは、肉食系女子の女性が松本潤という男の人を「飼っている」という話だった。どうして付き合っている男性を「ペット」と呼ぶのかというと、それは子供のとき飼っていた犬に似ていると思っているそうだからである。そういう彼女の性格はおかしくて、あまり女らしくないと考えることが出来る。草食男子も同様に理想的な男ではないだろう。

二年生のために、簡単な文法を使ったが、難しい言葉が入っているので、内容が全部分からなかったかもしれない。私も二年生のとき、先輩の発表はロールプレイの部分以外全然分からなかった。だから、ロールプレイをした方がいいだろうと思った。

自信がないし、発表をするのはあまり好きではない。広い講義室で話したので、緊張のあまり、上手に発表できなかつたと思い、がっかり気味である。恥ずかしすぎて、誰とも目を合わせる事が出来なくなってしまった。もし、またしなければならぬのであれば、発表の前に練習をたくさんした方がいいと思っている。

質問もよく答えられなかったと思う。質問が少なかつたし、ちょっと個人的になったので、恥かしくて黙り込んでしまった。もし、パワーポイントに写真などを入れれば、もっと面白くなり、誰か質問をしてくれたかもしれない。

横浜国立大学の学生は優しくて、発表後のディスカッションは面白かつた。皆の意見が違つたし、外国人の見方だけではなく日本人のことも聞くことができた。楽しくて、会えてよかつた。またエディンバラに来て下さい。

Ben Lawrence

Bournemouth University, 2010

When we were told about the dialog we could participate in we were all very excited, it gave us an opportunity to see what other cultures thought on the issue of migrant workers. Once we had the volunteers together we had a discussion and de-

cided the best way to get a discussion going between the universities was to only have a few slides and to discuss our view's showing what the media say about migration in the UK compared to what economists can prove. We felt that this worked very well as it brought us to a good discussion with the Yokohama National University students letting us represent both our views and showing the differences between our cultures.

All the Bournemouth students were very impressed with the amount of effort which had clearly been put in by the Japanese contingent and it was very informative. The YNU students came across at first very shy, however towards the end of the discussion this seemed to disappear and they were all very talkative. It was very nice to share a few drinks with them in the evening especially as we were all very impressed with their level of English and their ability to be able to use it to hold very in-depth conversations with us.

Overall, we found the whole experience very enjoyable and would love to see it happen more often.

Stefania Lauciello

University of pisa,2009

The Euro-japan Dialogue of November 2009 was a great chance for me to meet again the japanese students and professors and the Scottish Professor McAulay, who I met at Yokohama National University during the year I spent in japan attending the JOY program.

We discussed an issue that I personally consider very important, which is the reduction of CO2 emissions. It was very interesting to share ideas about this theme between Italian students who were talking from the Italian and European point of view, and Japanese students who were conversing from the Japanese and Asian point of view. I think everybody realized that to reduce the CO2 emissions around the world it is important to keep in mind the differences between the economic system and culture of each country. Moreover, human beings cannot be classified only by their nationality, their culture, but there are many aspects that make each individual different and special, so that to let the world become different and better it is necessary to improve the educational system to increase people's sensitivity to environmental issues, regardless of where they come from.in this way the next generation may probably do more than what we are doing for our world.

Jara Mare

Tomas Bata University,2009

We were more than happy to welcome the YNU students here

at Tomas Bata University in Zlin, in the Czech Republic. Even though their visit was a short one, it was a great and inspiring experience. The Euro-Japan program helped me to realize that people all around the world are often facing similar challenges as we are, and meeting Japanese students was an excellent chance to exchange different perspectives and viewpoints and learn from each other. Before the Euro-Japan program, I already had some knowledge of Japan. However, no information is better than the firsthand information. This opportunity enabled me to learn more about Japanese culture, language and way of living in general. Because we are coming from different parts of the world, we may have different ways of thinking. But it's the very cultural diversity that enriches us and helps us to understand ourselves better. I'm glad I could participate in this program and meet YNU students, who are nice and fun-loving people.They will always be welcome here.

Ulla Pirkola

University of Oulu,2008

We were delighted to host the visiting YNU group on the Euro-Japan Dialogue program in November 2008. They arrived just as the first snows of winter fell. As a student of Japanese with some experience of living in Japan, I looked forward to the debate sessions with great anticipation. Thinking about multiculturalism from the perspective of its impact and role in another culture made us take a look at Finnish culture in a whole new way as well. Talking with Economics students from Yokohama National University made us realize not only the differences in our cultures but also the many common things we share - and that will be a major advantage for us in our future studies and life.

Jamie Masterson

Cardiff University,2007

When the YNU students come to Cardiff, I learned a lot about Japan which I hadn't known before. I realised that there is only so much I could learn from books and that by discussing the issues with Japanese students I could understand the topic better from their point of view. It was also good to meet students from YNU as at that time I had an interest in studying in Yokohama as a foreign student. I arrived at YNU in 2008, and I have made friends with some of those students who took part in the program and from them I have learnt even more about both Japanese culture and language. I feel that the program helped to bring our universities, which are on opposite side of the world, closer together.

Euro-Japan Dialogue: Frequently Asked Questions

1. What is the purpose of the programme?

Euro-Japan is designed to give YNU students an intensive taste of academic discussion in overseas universities. They use real-life academic English in authentic settings. For the European participants, it is a chance to meet people from a distant culture. For European students studying Japanese, we include a Japanese-language session in the schedule. Sometimes, European students follow-up their participation in Euro-Japan by coming to YNU as exchange students.

2. What is the format?

The programme takes place over one week. The Japanese students meet in Europe on the Sunday evening and disperse the following Saturday. In between, they visit two European universities. The main event is the Euro-Japan Dialogue, a one-hour presentation and Q&A session on a set theme related to Economics, followed by one-hour of discussion. There are two points to note here:

a. *Euro-Japan is not a formal debate.* The sessions take place in a spirit of collaboration, not competition. Japanese students are on the whole unfamiliar with adversarial-style debate and often do not possess the advanced English-language skills needed to execute such an undertaking.

b. *The discussion is student-student oriented.* We find the students get the most from the discussion when they

are allowed to own it. For this reason, faculty members participate as observers, or moderators at most. We structure the sessions so that teachers' verbal participation is limited to brief closing remarks at the end.

The actual format may vary slightly depending on the needs of the host institution.

In the past, YNU students have also audited English lectures/seminars on the host campus, made company visits, and taken part in social events and tours of local places of interest.

3. Where do the Japanese students stay?

All travel and accommodation arrangements are taken care of by the YNU side. If the European side feels able to provide help with accommodation, local transport, etc., we of course welcome such offers. But we do not require or expect it.

4. Is the programme subsidized?

YNU participants receive partial funding towards their costs. This varies from year to year, but on average this has proven to be around a third of the total cost.

5. Who should apply?

In Japan, students who are independent, confident, have high-level English, and are willing to work hard in the preparation and execution of the programme, as well as complete the follow-up written reports and presentations when back in YNU.

On the European side, the program appeals to internationally-minded students with strong English and/or Japanese skills, who have an interest in foreign cultures and societies in general, and/or Japan in particular.

2011 年度事前・事後講習スケジュール



月日	授業内容	備考
4月		・欧州英語討論会の説明会開催、第1次参加者募集公示(4/15) ・応募申請書提出締切(4/28)
5月	・欧州英語討論会第1回ミーティング(参加者顔合わせ)	・第1次参加者選考面接(5/11~13) ・参加者決定(5/28)
6月	・経済に関する討論会トピックの検討 ・グループの決定(2グループ) ・リエゾン選出 ・討論会テーマの決定(マルタ大学: 高齢社会、エジンバラ大学: KY、本音と建て前) ・リサーチの開始	・第2次参加者募集公示(6月下旬)
7月	・第2次参加者顔合わせ ・第2次参加者グループの決定(マルタ大学: 高齢社会、エジンバラ大学: 女性の立場と役割、慣習と宗教観) ・討論会参加者全員の顔合わせ ・概要説明、今後の活動予定について説明	・応募申請書提出(6/25~7/7) ・第2次参加者選考面接(7/11) ・参加者決定(7/12)
8月	・全グループリサーチの開始	
9月	・コンペティション(中間発表)実施(文化に関するプレゼンテーション担当2グループ、経済に関するプレゼンテーション担当2グループ決定、(マルタ大学: 高齢社会、エジンバラ大学: 女性の立場と役割、KY)	・コンペティション(中間発表)実施(9/26)
10月	・危機管理、旅行日程についての説明 ・プレゼンテーション練習 ・プレゼンテーションの内容に対する想定問答集作成 ・リハーサル実施、プレゼンテーションのブラッシュアップ ・旅行日程最終確認	・リハーサルの実施(10/17)
11月	・欧州英語討論会に出発 ・エジンバラにて参加者全員集合(11/6) ・マルタにて解散(11/12) ・帰国後の事務手続き、アンケートの実施(11/21) ・成果報告会開催(11/28) ・報告書の提出	・欧州英語討論会に出発 ・現地集合現地解散(11/6~11/12) ・成果報告会開催(11/28)



エジンバラ大学指定トピック

1. 裏と表 / Two-faced Culture
2. 縦社会 / Vertical society
3. 慣習と宗教観 / Customs & religions
4. 女性の立場と役割 / Women's roles
5. 恥の文化 / Culture of Shame
6. 甘えについて / Amae
7. 場の空気を読む (KY について) / "Reading the atmosphere"



月曜日定例ミーティング



成果報告会

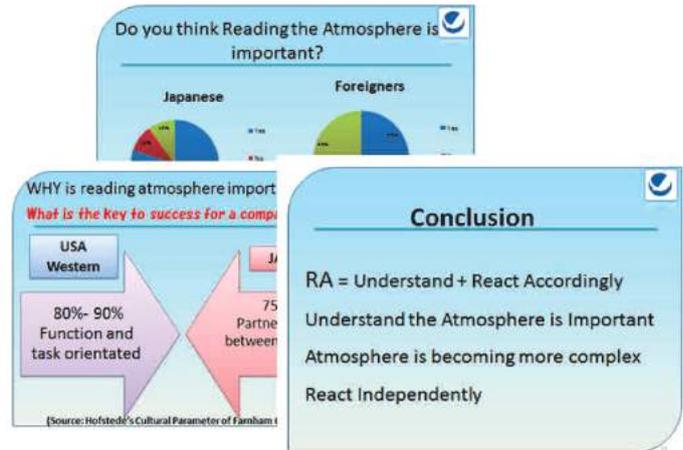


討論テーマと担当グループ

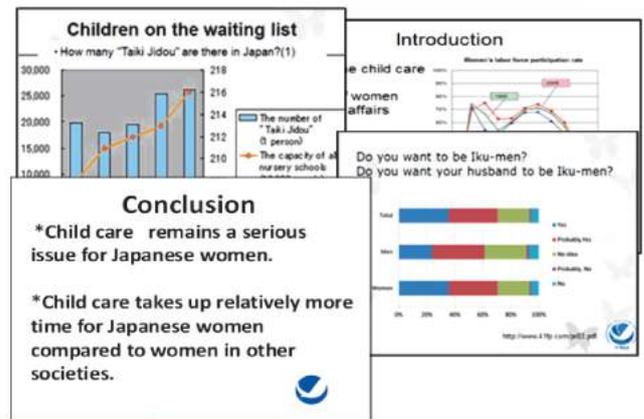


エジンバラ大学担当グループ

Theme KY (Reading the Atmosphere)
 Liaison Gerelt Odonchimeg
 Members Gonchigsuren Enkhsaikhan
 塚田 良美
 Quynh Tram Nguyen
 Vatanak Lim

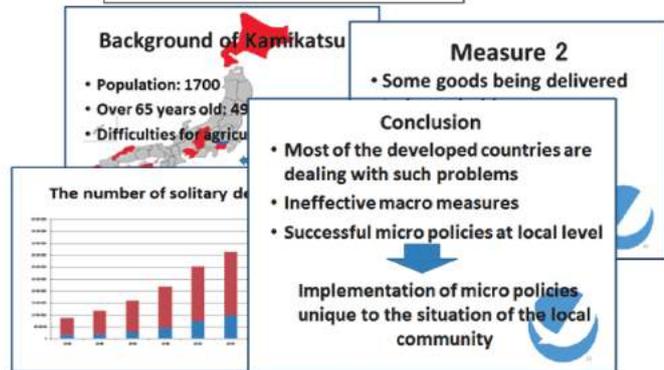


Theme Women's Role
 Liaison 森脇 啓太
 Members 原 崇宏
 李 貴愛
 Oyundari Gerelt
 Soojeong Choi

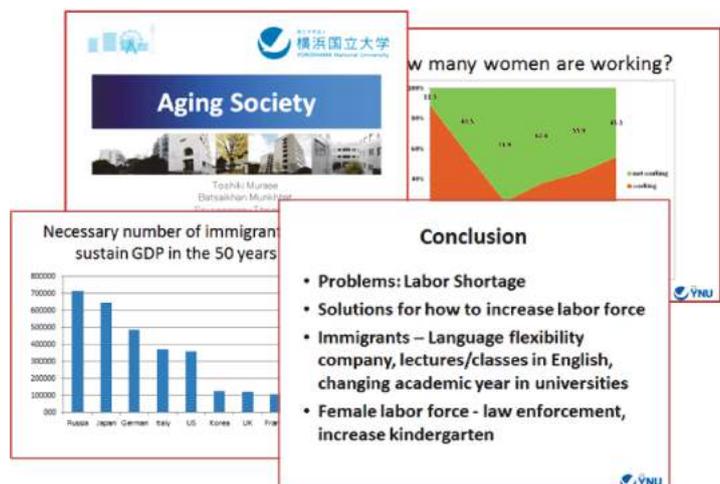


マルタ大学担当グループ

Theme Ageing Society
 Liaison 高木 和寿
 Members 岩崎 重和
 Attila Nyikes
 岡地 雄生
 西浦 里彩



Theme Tow-faced culture
 Liaison 村瀬 俊樹
 Members 山田 芳裕
 Thi Ngoc Anh Nguyen
 Thongxay Souvanmany
 Munkhbat Batsaikhan



欧州英語討論会実施スケジュール —エジンバラ大学・マルタ大学—

Sun,
Nov 6

現地 (エジンバラ) 集合

20:00 ミーティング



アダムスミス 像

Mon,
Nov 7

14:00 エジンバラ大生と
エジンバラ市庁舎訪問

16:00 University of
Edinburgh: Robson Lecture
Theatre にて
YNU プレゼンテーション

16:00 YNU presentation 1
テーマ: 場の空気を読む (KYについて) / "Reading the
atmosphere"
16:25 YNU presentation 2
テーマ: 女性の立場と役割 / Women's roles
Q&A/Discussion

交流会



エジンバラ市庁舎



YNU プレゼンテーション



グループディスカッション



プレゼンテーションを聞く参加者

YNU プレゼンテーション



交流会

Tue,
Nov 8

University of Edinburgh :
David Hume Tower Lecture
Theatre B にて

• UoE presentation 1
テーマ: ムラ社会
• UoE presentation 2
テーマ: 日本の男らしさ・女らしさ
• Q&A / Discussion

交流会



エジンバラ大学プレゼンテーション



グループディスカッション

Wed,
Nov 9

マルタへ移動:
午前 4 時エジンバラ出発



グランドハーバー(マルタ)



バレッタ

Thu,
Nov 10

The University
11:00 マルタ大学にてオリエンテーションと
キャンパスツアー
(Msida キャンパス)

首都バレッタ (Valletta) へ
移動

Cultural Tour of Valletta,
Dr E. Warrington,
Head of Department Public Policy
による史跡巡り



Malta 大学紹介 (国際課)



Dr E. Warrington に質問する YNU メンバー



Fri,
Nov 11

9:30 講演: 'Global Challenges in
Population Ageing',
Dr M. Formosa, European Centre
for Gerontology

Student presentations & Discussion
Discussion & Conclusion
テーマ: Ageing, Demographic/
Population trends and implications
for economies.

13:00 講義参加
"Policy Making
in Micro States"
(Mr.R.Micallef)

14:00 韓国大使 (在イタリア)
特別講演出席

交流会



YNU プレゼンテーション

マルタ大学プレゼンテーション

Mr R. Micallef による講義参加

交流会



プレゼンテーションを聞く参加者



Sat,
Nov 12

Euro-Japan Dialgue 2011
終了・解散



バレッタにて集合写真



History of Euro-Japan English Dialogue

2006 ● Youth Unemployment	
 University of Erfurt, Germany	 University of Paris 12, France
2007 ● Nuclear Power as Sustainable Energy	
 Cardiff University, Wales	 University of Pisa, Italy
2008 ● Multiculturalism	
 University of Bonn, Germany	 University of Oulu, Finland
2009 ● Declining birthrate: Target making babies or managing immigration? ● Carbon trading: Effective measure or too little too late?	
 Tomas Bata University, Czech Republic	 University of Pisa, Italy
2010 ● Education styles: Are there economic consequences? ● Is immigration a solution to labour shortages?	
 University of Paris-est Creteil, France	 Bournemouth University, England
2011 ● Women's role, KY (Reading the atmosphere) ● Ageing Society	
 University of Edinburgh, Scotland	 University of Malta, Malta

欧州英語討論会が成立するまで

欧州英語討論会の原型は 2003 年にエルフルト大学（ドイツ）と実施した英語討論会です。当時、経済学部は短期留学生派遣を開始したばかりで、この英語討論会も本学で行いました。

- 2003 年 エルフルト大学と英語討論会
(横浜国大にて、経済学部学生参加)
- 2004 年 エルフルト大学と英語討論会
(横浜国大にて、経済、経営学部学生参加)
- 2005 年 エルフルト大学と英語討論会
(横浜国大にて、経済、経営、工、教育人間科学学部学生参加)
- 2006 年 International Students Program (3 国 5 大学の参加：
横浜国大、早稲田大学、延世大学（韓国）、エルフルト大学、ワイマール大学)
- 2006 年 第 1 回欧州英語討論会開催
- 2009 年 課題プロジェクト演習「実践的国際化プロジェクト」
(文部科学省により大学教育・学生支援推進事業
[テーマ A] 大学教育推進プログラムに選定されたプロジェクト) の中に位置づけられる

2011 年 単位認定科目となる
文部科学省留学生交流支援制度に選定される

欧州討論会目的

1. 実践的かつ高度な英語力養成：英語討論会などを通して
2. 国際交流の促進：現地の学生との交流などを通して
3. 経済学的な関心への喚起：現地の企業見学、経営者との懇談などを通して

参加基準

1. 成績優秀で人物が優れているもの
2. 英語で討論する心構えのあるもの
3. 国際交流に関心があるもの

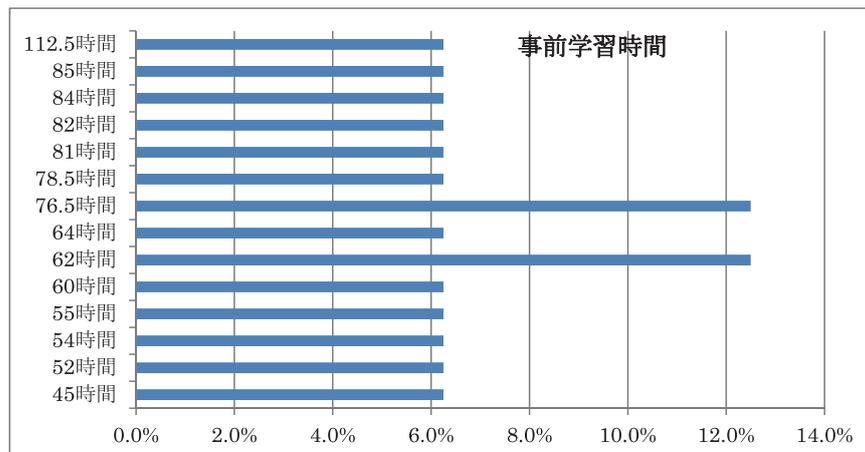
参加条件

- 海外旅行保険加入
- 留学生危機管理サービス加入

欧州英語討論会についてのアンケート結果

A) 事前講習に要した時間

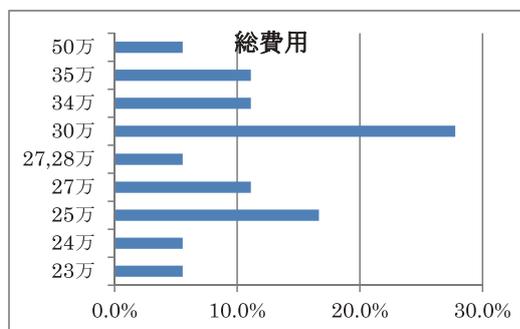
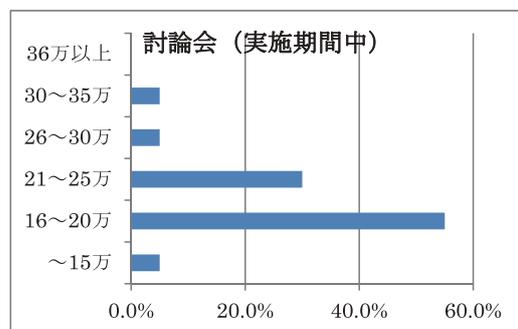
個人的な学習時間平均 76.7 時間



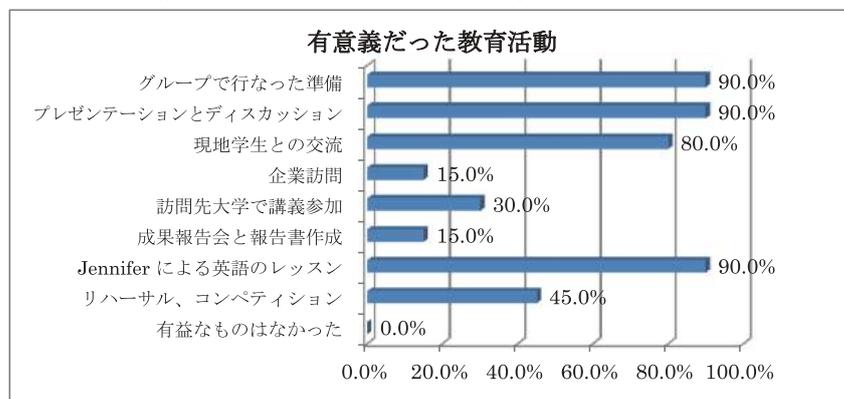
B) 費用について :

①航空運賃と欧州英語討論会開催中の宿泊、交通、保険、食費。

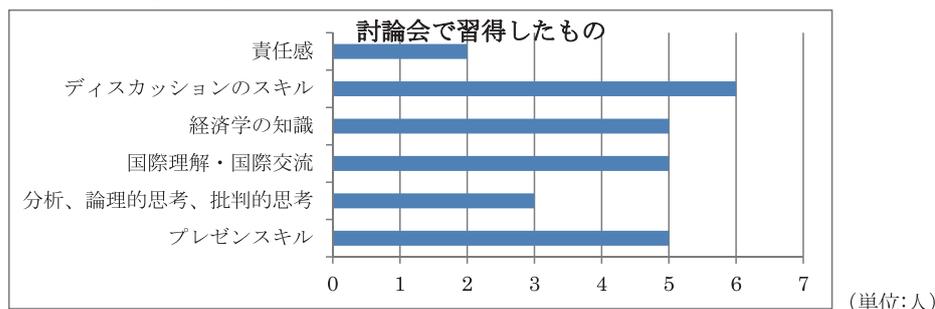
②討論会前後の個人的な旅行を含めた総費用



C) 欧州英語討論会全体のアクティビティで有益だった教育活動



D) 欧州英語討論会の成果



E) 欧州英語討論会を充実させるための改善点

ディスカッションの時間をもっと長くする。5月か6月に行う。企業訪問実施。